

年頭雜感

北條民雄

青空文庫

思へばここ数年来、年あらたまる毎に私の生活は苦痛を増すばかりであつた。十七の春、小林多喜二氏の「不在地主」を読んで初めて現実への夢を破られた私は、それ以来愚劣な人生と醜悪な現実を友として過して来た。夢は遠く消え失せ、残つたものは冷い鉄くづや、何の役にも立たない石ころばかりであつた。そしてエントロピーが極大限に達した瞬間を想像しては、にやにやと笑ふのであつた。それ故に癩の発病は私に対して大した力を持たなかつた。お前の病気は癩だと医者にはれたとき、私はなんとなく滑稽になつてにやりと笑つたのを覚えてゐる。あれは四国の私の田舎の皮膚科病院の一室であつたが、その時私の体内の熱は平衡に達してゐたらしい。私は自分の体内に新しく癩菌といふ友人を発見して、恐しいといふよりも奇妙な楽しさを覚えてをかしかつたのである。しかし、この新しい友人のなんと執拗な力を持つてゐることか。私の熱平衡は徐々にくづれ、それまで私の理性の圧迫下で黙々と耐へてゐた「苦痛」といふやつが、少しづつ頭を拾げて、やがて理性に対決する力を持ち始めたのだ。そしてこれは必然私にペンを持たせた。私は文学といふものが初めて必要になつたのである。

「私は文学者、筆あるが故に筆を通じ、筆と共にゐるからこそ、ものを感じて来たのです

と、ギユスタフ・フロオベルは書簡に言ふ。筆と共にあるからこそものを感じて来た——もし小説を書かなかつたら、私は今持つてゐる唯ひとつの夢をすら持ち得なかつたであらう。さう、苦痛は私に夢を与へた。そして夢あるが故に、苦痛はますます激しさを加へて行くであらう。

また新しい年をひとつ迎へた。二十四度目の正月である。二十三度目の正月よりも苦痛は深い。しかし苦痛が私を救つたのではないか。それなら苦痛とは何ものなのか。それは説明など出来ないものだ。ただ小説といふ武器をもつて追求して行くだけだ。これが年頭に際し、先づ私の頭に来る感想である。

「同情ほど愛情から遠いものではありませんからね。」

と私は佐柄木に言はせて置いた。同情と愛情とを混同するなかれ。私が欲しいものは愛情。同情など断じて私は求めはしない。

(未完?)

青空文庫情報

底本：「定本 北條民雄全集 下巻」東京創元社

1980（昭和55）年12月20日初版

初出：「科学ペン」

1938（昭和13）年

入力：Nana Ohbe

校正：伊藤時也

2010年9月12日作成

2011年4月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

年頭雑感

北條民雄

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>